



従業員は会社の宝なり 熟練の技を育む 「人間への想い」

竹安 猪三郎 (1912~1986年)



株式会社 錢屋アルミニウム製作所

本社所在地：大阪府池田市豊島南2-176-1 従業員数：294名 資本金：9,900万円
設立：1933(昭和8)年
事業内容：アルミニウム展伸材及びその他金属板のプレス及び板金加工

猪三郎の生い立ちと商いの原点

1 1912(大正元)年10月、錢屋アルミニウム製作所の創業者・竹安猪三郎は現在の兵庫県丹波市に生まれた。母の勧めで地元中学を卒業後すぐに丁稚として働くこととなった猪三郎は、次兄の伝手を頼って家庭器物商「乾又吉商店」に入社した。会社では、当時まだ新しい素材だったアルミニウムを使った分野に進出するため人材を求めており、猪三郎はそこで「このアルミという金属に人生を賭けてみよう」と決心した。

乾又吉商店では10名ほどの店員が働いており、猪三郎はハッピーに草履姿で荷造りや配達の仕事で忙しくこなした。暑い夏の日も、切り裂くような冬の風の中でも、大八車を引いて廻ったという。

転機が訪れたのは1933(昭和8)年のことだった。堺市で創業したアルミ日用品会社の経営に参画することとなったのである。アルミ製品の販売責任者となった猪三郎は日本全国を飛び回り、果ては朝鮮・満州にまで販路を拡大した。その後、日中戦争勃発に伴い統制令が敷かれ、アルミが手に入らない状況へ陥ると、猪三郎は単身満州に渡るとともに独立し「興和洋行」を立ち上げ、関東軍に日用品器物やホーロー鉄器などを納めた。

この時猪三郎はまだ20代後半に過ぎなかったが、その商才を遺憾なく発揮し、大連の地で3つの工場を経営するにまで上り詰めた。



乾又吉商店入社当時の猪三郎

社員全員での帰還を目指し ソ連軍との交渉に腐心

若くして大車輪の活躍を見せた猪三郎だったが、それは長く続かなかった。1945(昭和20)年に終戦を迎えると、大連にソ連軍が進駐。工場はすべて接収され、ソ連軍向けに皿などのホーロー製品を作るよう命ぜられた。敗戦のショックが冷めやらぬ状況であったが、猪三郎はソ連軍側との交渉に臨み「真面目に働いて良い製品を造るから、その代わりに工場関係者全員を一団として無事日本へ帰国させてくれ」と司令部へ依頼したという。猪三郎の立場であれば、自分たち一家だけで早々に引き上げることも可能だっただろうが、工場の部下たちを見捨てるようなことをせず、工員とその家族総勢250名を全員一緒に帰国させることに腐心したという。

1947(昭和22)年、終戦から1年以上が過ぎた春先、ついに猪三郎は日本の地へ戻る事ができた。

ゼロから出発した「錢屋アルミ」

無一物での再出発となった猪三郎であったが、満州時代に深めた人脈を伝手に得た事業資金をもとに、1947(昭和22)年、大阪市南区に「大根卸し」などの家庭器物を扱う金物卸問屋「興和物産」を立ち上げた。それから数か月後、問屋から製造業に転換するため、興和物産を発展的に解消、1948(昭和23)年8月、大阪市西成区の一戸を借りて事務所として錢屋アルミニウム製作所を創立し、木造平屋建て500㎡の工場を建設、パワープレス等8台の生産設備を備えた。プレス製品として「大根卸し」、「丸柄杓子」や「お盆」を手掛けた。斬新で様々な意匠の「お盆」は、各家庭はもちろん、喫茶店・食堂等でも広く愛用され、錢屋アルミは「お盆の錢屋」として全国に知

れ渡り、アルミプレス加工の家庭器物メーカーとして世間に認められるようになった。

飛躍の足掛かりとなった 新分野への参入と新しい取引

順 調な経営を進めていた錢屋アルミニウム製作所であったが、1952(昭和27)年末頃になると朝鮮戦争の特需景気の反動による影響が現れるようになる。深刻な不況、有力問屋の倒産、不渡り手形、在庫の山、資金繰りに追われるなど経営は苦しくなった。そんな中、猪三郎は戦後復興最中の弱電業界が飛躍的に発展していることに注目、家庭用電気製品メーカーの協力工場に徹することを決心した。

1953(昭和28)年、松下電器産業(現・パナソニック株)との初取引は第四事業部の「蒸気アイロン水缶」の試作だった。その3年後には同社姫島工場の協力工場として自動炊飯器用「鍋・蓋・中板」等を全数受注できるまでになった。だが鍋底に要求された曲率690Rは当時の錢屋アルミの技術力では大変なハードルとなり、不良在庫の山を築くことになった。猪三郎を筆頭に、工場長も幾晩も徹夜して取り組み、「鍋の底に少し熱を加えて押し直す」という手法を考案し、修正に成功した。更にその後は要求寸法通りにR面を出す事にも成功した。技術力の向上に伴い、取引は松下電器産業の電熱器事業部・テレビ事業部・洗濯機事業部へと拡大した。

西成工場が手狭となったので、1957(昭和32)年、縁あって大阪市淀川区十三に新たに十三工場を設けることができ、プレス加工の生産能力を上げた。また、プレス部門以外に、鋳金や溶接分野にも進出した。1959(昭和34)年、(株)神戸製鋼所が耐食アルミ合金材を開発、多くの需要分野が開拓される中、同社の系列会社である神鋼電機(現・シンフォニアテクノロジー株)より航空機用アル

初期の自動炊飯器



蒸気アイロン用水管

家庭用電気製品メーカーの下請け工場として様々な要求に応えていくことで、技術力が飛躍的に向上していった。

ミタラップを3台受注した。こうして鋳金加工の部門も好調な滑り出しを見せ、十三工場の生産能力も一杯になっていった。

新製品「ゼニライト」の開発

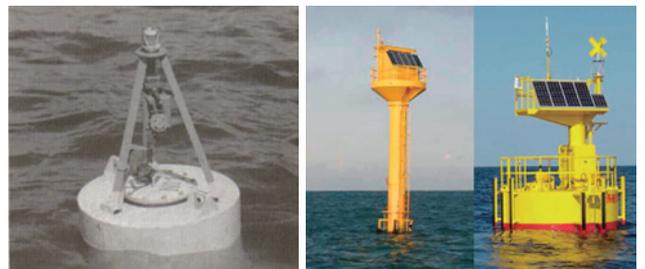
1 962(昭和37)年、大阪府池田市にプレス工場を建設、同時に西成工場を閉鎖し、十三と池田の二工場体制となった。

1963(昭和38)年、「竹安式簡易自動点滅式灯浮標ゼニライト1型」を当時の運輸省第五港湾建設局名古屋港工事事務所に納入した。唯一の自社ブランド製品として、従来とは全く別種の新製品が誕生した。全国の港湾、漁港、港湾建設業をはじめ、エネルギー関連企業や海外の顧客に対して、船舶の海上交通安全に寄与する製品であった。

同年、プレス事業部、特機事業部、浮標事業部の事業部制を採用し、経営の効率化を図った。事業部制が充実し、売上の伸展及び受注の増加と共に設備の新設増強をはかり、ようやく会社としての基盤を確立でき、新しい飛躍へのスタート台に立った。

自動化の推進と高度な技術力の獲得

家 庭用電気製品メーカーからの生産増強の要請に対応するため、量産化に取り組んだ。非常に困難で他社にあまり事例がなかったとされる深絞り加工プレス機の自動化、加工精度の高いダブルクランクプレス機や、材料挿入から数工程を一台のプレス機が連続で自動加工を行うトランスファープレス機なども積極的に導入した。更にプレス加工の後工程である研磨の自動化や、当時最先端の自動アルマイトラインなどを導入し、完成までの一貫ラインを完備することによって、鍋の工程においては完全自動化を達成した。



ゼニライトの試作1号機(写真左)

竹安式簡易自動点滅灯浮標「ゼニライト」は今日のブイの原点であり、のちに観測用(写真右)・海洋牧場用・人命救助用などその応用範囲を広げた。津波や高波、高潮の洋上観測用に利用されるなど、防災面でのニーズの高まりも受け、同社事業の柱の一つとして成長している。その技術力・開発力は海外においても高く評価され、全世界で海の安全を見守っている。

「アルミ」を基盤とした 新分野への水平展開

松 下電工化学材料事業部からは台所用床下収納ユニットの木製の色調を持ったアルミ枠を受注した。当時アルミニウムのカラー化が始まり、同社第二建材事業部から玄関ドアユニット「ナウカラー」と日本の伝統美を表す格子様式の工芸玄関引戸を受注した。空調設備、車両関係及び板金製品を、1978(昭和53)年設立の錢屋アルミ産業(株)に移管した。

1972(昭和47)年に浮標事業部より設計、営業部門を分離、独立して(株)ゼニライトブイを発足させた。翌年にはブイの設置工事、保守点検、海洋の調査等を専門とするゼニヤ海洋サービス(株)が設立された。同社はその後独自の道を拓き、ダム、河川の防塵施設、浮棧橋、その他水辺に関する施設の開発を手掛け、電力会社やマリーナ等で多くの実績を上げていった。

猪三郎の想いは時代を超えて

1 948(昭和23)年、西成区に10人で立ち上げた会社は、猪三郎が逝去した1986(昭和61)年、38年の時を経て7社からなる錢屋アルミグループに成長した。しかし、猪三郎の部下を大切にすることは最後まで変わらなかった。同社の60年史にはOBより猪三郎に関する以下のエピソードが寄せられている。

——寒い冬の日、取引先の会社の前を歩いていると、猪三郎さんの黒い車が止まって、会社まで乗って帰れと言うんです。で、鍋の修理作業の後で、服が汚れていたから、運転手が私らの座るシートに新聞紙を敷いたんです。そしたら、猪三郎さんがえらい剣幕で、『なにすねや！この子らが働いてくれるから、ええ車に乗れるんやろ。シートなんか洗ったらしまいやないか！』と運転手をどやしつけたんです。本当に

創立記念式典の様子

円高により日本の景気が低迷するなか開かれた式典において、猪三郎は陶工・佐野乾山氏の言葉を引用し、社員に自らの想いを伝えた。



従業員を大切に思ってくれているのだと、当時感激した記憶があります。

猪三郎の経営への想いは創立記念式典の式辞にも表れていた。「私は常々皆さんに言って来ましたように『従業員は会社の宝なり』という信念を持って経営して参りました。(中略)陶器の名人・佐野乾山が「常々歳旦の心を忘れず」と言われたと聞いています。貧乏で苦しみながらも、それを乗り越えた時の気持ちをいつまでも忘れないというのが私の一貫した気持ちです。(中略)今後もやっぱりこういう質素な、そして内輪だけで従業員を中心にして、家族的に厳粛なお祝いだけをしたい、また創業の精神に触れたい。(中略)毎年同じような創立記念日をやるようにしたいと思います。」

猪三郎は、1972(昭和47)年11月「昭和47年度科学技術功労者」として黄綬褒章を受章、1982(昭和57)年11月には勲四等旭日小綬章を受章した。長年にわたる研究開発と発案考案により海上交通の安全確保に貢献した功績を認められたのだ。

1986(昭和61)年8月、決して弱音を吐かず、失敗を恐れず、諦めず、創意工夫し、常に感謝の念を忘れず、社会の公器として、人間の本質を直感的に分かるとともに人を愛し、神仏を敬してやまなかった竹安猪三郎は74年の生涯を閉じた。猪三郎の部下への想いと不屈のチャレンジ精神は、時代の移り変わりの中にあっても新しい分野へ果敢に参入していく原動力となって、現在の社員の心にも連綿と受け継がれている。



黄綬褒章受章の様子

「錢屋」の由来

猪三郎は少年時代から『立志伝』を愛読し、徳川時代の豪商・錢屋五兵衛の生きざまに深く共鳴したことから社名を“錢屋アルミニウム製作所”と定め、また、錢屋五兵衛の旗印“丸五”にちなみ「寛通宝」を社章とした。「寛通宝」は、江戸時代300年の主要貨幣で、その流通性を失ってもなお人々に親しまれる古銭である。すなわち、人々から愛され親しまれる会社であり製品であり続けることが、この社章によって表されている。

